

フィンランド語話者にとっての 日本語の音韻体系

堀 蒼子美

[キーワード]

フィンランド語話者 音韻体系の比較 音節構造 音素 日本語の発音

はじめに

フィンランドのヘルシンキ大学で日本語講座を担当したとき、フィンランド語を母語（注1）とする学習者の日本語の発音習得に幾つかの特徴が見られた。

フィンランド語は日本語の長音や促音に相当する音節を持ち、子音群（consonant cluster）が少なく、日本語とは音節の構造が極めて類似している。（注2）このためフィンランド人にとって日本語の発音はインド・ヨーロッパ系の言語より易しいものとみなされて、二つの言語の音韻構造の対照研究をもとにした指導は行われてこなかった。これを補うために、前稿（堀（1993））では音節構造の類似に関して、特に子音群の構造の分析に焦点をあて、フィンランド語の子音群の多くは日本語の音韻体系の範囲で説明できることを明らかにした。

本稿では、ふたつの言語の音素とその具体的な現れである発音に焦点をあてる。特に、日本語の音節をフィンランド語の音韻体系のふるいにかけた場合、日本語の各音節はフィンランド語のどの音節で処理されるのが適切かということをもとにフィンランド語話者の日本語学習過程で生じた事例の分析をもとに考察する。

本論に入る前に、フィンランド人に日本語の発音を指導する際の参考になるように、第一章でフィンランド語の音韻体系を概説する。（注3）

I. フィンランド語の音韻体系

フィンランド語には8つの方言があるが、ここで扱うのはフィンランド南西部の方言をもとにしたフィンランド語の標準語である。また、フィンランド語にはスウェーデン語からの借用語があるが、借用語にだけあらわれる音は観察の対象としない。

フィンランド語はラテン文字をもって表記され、正書法は1音素1文字対応(one phoneme, one grapheme)のほぼ完全な音素表記である。(本章2. ①参照)ただし、[ŋk]は「nk」と[ŋŋ]は「ng」と表記される。従って本稿ではフィンランド語の単語に発音記号をつけない。

1. 母音

フィンランド語には母音が8つある。これらはa, e, i, o, u, y, ä, öと表記される。その8つの母音はすべて長母音となり、一つの音節を作る。長短は対立し、弁別的である。また、異なる二つの母音が連続して一つの音節をなすと見なされる二重母音もある。

① 短母音

8つの母音は音声的に次のような特徴を持つ。

＜表1＞母音音素の体系

	前舌		後舌	
	非円唇	円唇	非円唇	円唇
高	i [i]	y [y]		u [u]
中	e [e]	ö [ø]		o [o]
低	ä [a]		a [a]	

Karlsson(1991)

② 長母音

フィンランド語では8つの母音すべてが長母音になり、母音の長短が語の意味を区別する。長母音は母音を2つ重ねて表記される。

{ s a v i (土)	{ t e (あなた)	{ t u l i (火)
{ s a a v i (おけ)	{ t e e (お茶)	{ t u u l i (風)

8つの単母音と長母音の例を単語の中で示す。大文字で始まるものはいずれも人名・地名など固有名詞である。

a Anu, aa Saana, e Emma, ee Eeva,
i Ilona, ii Niina, o Osmo, oo Espoo,
u Suomi, uu Uuno, ä Säde, ää ääni (音),
ö Pöyyr, öö, Töölö, y Yrjö, yy sy (原因)

③ 二重母音

フィンランド語の二重母音は、異なる2つの母音が連続し1つの音節をなすもので、それぞれの母音が明確に発音される。二重母音には、前の母音から後の母音へ舌の位置が上がっていく「上がり二重母音」と、舌の位置が下がっていく「下がり二重母音」がある。これらは[i][u][y]と他の母音との組み合わせであり、パターンは以下のとおりである。大文字で始まるものは人名や地名である。

〈上がり二重母音〉

iでおわるパターン ai ei oi ui yi äi öi
Aino Eila Toivo Tuija lyijy (鉛) Päivi
söin (音)

uでおわるパターン au eu iu ou

Mauno Seurasaari viulu (ヴァイオリン) Outi

yでおわるパターン äy öy

käydä (通う) pöytä (机)

〈下がり二重母音〉 ie uo yö

Miettinen Ruotsi syödä (食べる)

2. 子音

① 子音の種類

フィンランド語の子音音素に関する主要な研究を見ると、Branch (1990) は子音音素数を14としているのに対し、Karlsson (1991) と Lieko (1992) は13としている。しかし、/v/に関してはKarlssonが[v]を有声の両唇摩擦音としているが、Liekoがこれを/j/と同じく半母音として扱っている。また、Branchは喉頭閉塞音 (final position glottal stop) (注4) を形態音素としているため14となる。

三者とも/ts/を独立音素として扱っていない。しかし、本稿では/ts/を子音音素として扱う。その理由としては(1) tsは語頭にこないものの、すべての母音が後続し、独立音素として扱われているdと同じ環境で現れる、(2) /s/とも/t/とも対立をなす、(3) 対照する日本語の音韻体系ではこれを一つの音素として扱っている、(4) ウラル語学者の中にはこれを独立した音素と見なしている者もいる、からである。KarlssonとLiekoのたてた13の子音音素に/ts/を加えたものが<表2>である。

<表2> 子音音素の体系

m	n	ŋ
p	t	k
	d	
	s	h
	ts	
v		
	l	j
	r	

<表3> 正書法

m	n	n(k)/ng
p	t	k
	d	
	s	h
	ts	
v		
	l	j
	r	

<表3>で示したように、それぞれの子音を表す文字はd, g, h, j, k, l, m, n, p, r, s, t, vの13個である。しかし、gはいつも

— n g — という環境であらわれる。この〈表2〉と〈表3〉を比べると、一音素—文字の原則がほぼ守られていることが分かる。また、アルファベット b, c, f, q, w, x, z は外来語を表記するときのみ用いられる。

② 長子音

フィンランド語では d, g, h, j, v 以外の8つの子音は長子音となり、単子音と対立する。長子音は子音を二つ重ねて表記される。

{ k u k a (誰)	{ p a l o (火事)	{ k a n a (鶏)
{ k u k k a (花)	{ p a l l o (ボール)	{ k a n n a (運べ)

長子音を含む単語を示す。以下の単語はすべて人名である。

pp Seppo, tt Matti, kk Jaakkkola, ss Jussi,
mm Emmma, nn Hanna, ll Ollli, rr Harri

③ 子音の結合

子音の結合は音節内や語中での位置によって制約がある。—は音節の切れ目を、Cは子音を、Vは母音を示す。

〈第一音節〉語頭には外来語以外では2つの子音がくることはない。

a s e (武器) V ~ k a t u (道) C V ~

〈音節尾〉2つの子音で終ることがある。

m y r s — k y (嵐) C C —

〈最終音節〉語末に単独の子音がくることがある。それは歯茎音の [t] [s] [n] [r] [l] の5つである。また2つ以上の子音がくることはない。

k e v ä t (春) r i k a s (金持ち) a v a i n (鍵) t y t ä r (娘)
k y y n e l (涙) ~ C

フィンランド語の音節構造は以下のような構造式で表わされる。() と [] は省略可能な要素を示す。

語頭 (C) V ~

音節の切れ目 ~ V [(C) C] — (C) V ~

語尾 ~ V (C)

3 音節

音節には母音で終わる開音節と、子音で終わる閉音節がある。

開音節 s a - n o - m a (新聞) CV - CV - CV

閉音節 p a l - j o n (たくさん) CVC - CVC

4 アクセント

フィンランド語は奇数音節強勢をもつ。つまり主強勢は第一音節に、副強勢は第三音節にくる。

s ú o - m a - l à i - n e n (フィンランド人)

II. フィンランド語と日本語の音韻比較

本章ではまず、日本語とフィンランド語の音韻体系を比較し、その違いを明らかにする。次にフィンランド語話者によって日本語の音節がどのように発音されるかを、実際の日本語習得過程で生じた事例の分析をもとにまとめ、特に発音されにくいものは、フィンランド語のどの音節で処理されるのが適当なのか検討する。

1. 母音の対応

日本語の母音とフィンランド語の母音の対応を簡単に示すと、以下のようになる。丸で囲んだものが日本語の母音で、下線のあるものがフィンランド語の母音である。

〈表4〉日本語の母音に対応するフィンランド語の母音

	前舌	後舌
高	<u>①</u> <u>y</u>	<u>③</u> <u>u</u>
中	<u>②</u> <u>ø</u>	<u>④</u>
低	<u>a</u>	<u>⑤</u>

フィンランド語の8つの母音のうち4つは日本語のア、イ、エ、オにはほぼ等しいということがわかる。また、ウに関して、日本語のウ [u] をフィンランド語の u [u] で発音しても意味が取り違えられることはない。しかし、母音の無声化がなされなかったり、/m/の前に現れるウが明瞭に発音されるときに不自然な響きを持つことはあるが、これはいずれも母音の無声化が守られない場合の一般的な問題で、音価の違いからくることではない。

2. 子音・半母音の対応

音節を単位とした日本語の子音音素に対する主な考え方は以下のような。上村(1988)はチとツの子音をひとつのものと扱い、日本語の音節を13に分類し、13の音素をたてている。また、服部(1990)はこれに鼻音化されたガを加え14の音素をたてている。今田(1989)は直音と拗音を分け、直音を12、拗音を11あげている。小松(1981)はタ行の例をあげ、3音素を認める解釈と拗音音素 /j/ をたて2行で表わす解釈もあるとし、立場や解釈により音素の考え方はいろいろあるとしている。本稿では拗音を含む日本語の音節を一つずつ観察していくので、「坂」と「釈迦」を [s] と [ʃ] の対立と見、拗音の中で直音の子音でもあるものはひとつの音素と考える。日本語の子音と半母音に対応するフィンランド語の音素を以下に示した。

〈表5〉日本語の子音・半母音に対応するフィンランド語の音素

	両唇音	歯茎音	歯茎硬口蓋音	硬口蓋音	軟口蓋音	声門音
鼻音	m	n				
破裂音	p	t			k	
	(b)	* d			(g)	h
摩擦音		s	(ʃ)	ç		
		(z)	(z)			
破擦音		* t s	(t ʃ)			
		(d z)	(d ʒ)			
はじき音		(r)				
半母音			j	w		

* フィンランド語では環境が制約されているもの

() フィンランド語には存在しないもの

この対照表から明らかなように、日本語にあってフィンランド語にない子音音素がいくつか存在する。つまり、フィンランド語は日本語に比べて有声子音が少なく、数少ない有声子音も環境に制約がある。まず、日本語にある無声破裂音 [p] [t] [k] はフィンランド語にも存在するが、その有声子音 [b] [d] [g] は揃っていない。また摩擦音も無声音の [s] は存在するが、有声音の [z] は存在しないことが分かる。

3. フィンランド語話者にとっての日本語の音節の発音

2. で日本語はフィンランド語に存在しない子音音数があることが分かった。しかし、フィンランド語には8つの母音があり日本語にない子音音素があることから、音節に関しても日本語にないものが存在することが予想できる。ここでは、日本語がフィンランド語の音韻体系のふりいにかけられた場合どんな問

題が生じるのか、フィンランド語話者の日本語学習の過程で生じた事例をもとに考察する。特にフィンランド語の音韻体系の中で処理されにくい日本語の音の扱いに関して、日本語の発音を音節単位でとらえ、各音節に最も近い音節をフィンランド語の中から探す。前稿（前掲）で日本語とフィンランド語の音節構造が極めて類似していることが明らかにされたので、本稿では音節単位で発音の問題を考察する。

五十音図の順に子音・半母音と母音音素の組み合わせ、および代表的な発音をひとつひとつ見ていく。日本語の音節の中で、フィンランド語には存在しない音節に▼を、音声的には異なるが日本語では対立しないもの、つまり日本語で異音の範囲である音がフィンランド語に存在し音節を形成するものに▽を、カタカナの脇に記した。各音節の音声表記はカタカナの下に国際音声記号で示し、またその下にはフィンランド語で最も近いと思われる音節を記した。

① カ行 ガ行

カ	キ▽	ク▽	ケ	コ
日 [k a	k i	k u	k e	k o]
フ [k a	k i	k u	k e	k o]
キャ▼	キュ▽	キョ▼		
日 [k j a	k j u	k j o]		
フ [――	k y	――]		
ガ▽	ギ▽	グ▼	ゲ▽	ゴ▽
日 [g a	g i	g u	g e	g o]
フ [ŋ a	ŋ i	――	ŋ e	ŋ o]
ギャ▼	ギュ▼	ギョ▼		
日 [g j a	g j u	g j o]		
フ [――	――	――]		

フィンランド語の／k／は日本語の／k／より軟口蓋の奥で発音される。なかでもキ [k i] は口蓋化するので、口蓋化のないフィンランド語の [k i]

と比べると、一層前寄りに調音点があるように感じられる。

フィンランド語に [k] はあるが、[g] はない。文字としての「g」はいつも「-ng-」という環境で現われ、このとき「g」は [g] でなく [ŋ] と発音される。

Helsingissa [ŋi] (ヘルシンキで) Hangossa [ŋo] (ハンコで) sängät [ŋa] (フレーム) hanget [ŋe] (かたい雪)
日本語のガ行はこの [ŋ] で発音され、鼻音化しやすい。

カ行の拗音のキュは、フィンランド語の「kylä」(村) が近い。

② サ行 ザ行

サ▽	シ▽	ス▽	セ▽	ソ▽
日 [s a	ʃ i	s u	s e	s o]
フ [s a	s i	s u	s e	s o]
シャ▽	シュ▽	ショ▽		
日 [ʃ a	ʃ u	ʃ o]		
フ [s a	s u	s o]		
ザ▼	ジ▼	ズ▼	ゼ▼	ゾ▼
日 [z a	ʒ i	z u	z e	z o]
フ [—	—	—	—	—]
ジャ▼	ジュ▼	ジョ▼		
日 [ʒ a	ʒ u	ʒ o]		
フ [—	—	—]		

フィンランド語の /s/ は、歯茎摩擦音 [s] と日本語のシの子音である歯茎硬口蓋摩擦 [ʃ] との間であり、日本語のサとフィンランド語の /s a/ は異なる。聴解印象からその対応を表すと以下のようなになる。

(日) サ シャ
 —————
(フ) s a

[s] に対し、その有声の歯茎摩擦音 [z] は存在しない。[ʃ] に対してもその有声の歯茎口蓋音 [ʒ] は存在しない。

ザ行の音はフィンランド語話者が最も困難を感じる音である。上級学習者でもこれをサ行に置き換えて発音することがある。ザ行が語頭にある場合には、そこに注意が向けられて比較的正しく発音されるが、特に語中において注意が向けられないと「おじぎ」が「おしぎ」となったり、「かざん」が「かさん」と発音されることがある。

③ タ行 ダ行

タ	チ▼	ツ▽	テ	ト
日 [t a	t ʃ i	t s u	t e	t o]
フ [t a	—	t s u	t e	t o]
チャ▼	チュ▼	チョ▼		
日 [t ʃ a	t ʃ u	t ʃ o]		
フ [—	—	—]		
ダ	デ	ド		
日 [d a	d e	d o]		
フ [d a	d e	d o]		

歯茎破裂音 [t] と歯茎摩擦音 [t s] はフィンランド語に存在する。しかし、歯茎摩擦音 [t s] はフィンランド語では語中には現れるが、語頭には現れない。

k a t s e (目付き) l a k r i t s i (お菓子の名前)

k a t s o (見ろ「見る」の命令形) k u t s u (招待) m e t s ä (森)

また、フィンランド語の [t s] は日本語より若干長く発音される。この違いは以下のように示すことができる。

(日) く つ

(フ) k u t s u (招待)

語頭にあらわれる日本語のツはチュになりやすい。特に初級の学生に「つま」

が「ちゅま」と、「つくえ」が「ちゅくえ」と発音されることがある。これは日本語のチュとフィンランド語の t s u の聴解印象が次のような対応をなしていることによると思われる。

(日) つ ちゅ
 (フ) t s u

歯茎硬口蓋破擦音 [tʃ] はフィンランド語には存在しない。日本語のチ、チャ、チュ、チョに相当する音節はない。

フィンランド語の歯茎破裂音 [d] は語中には現れるが、語頭には現れない。

s a d a n n e s (百番目) s a d e (雨) m a h d o t o n (不可能)

また、フィンランド語話者に日本語の語中の d が発音されるとき、「ふだん」が「ふらん」となったり、「ゆでん」が「ゆれん」と発音され、語中の [d] が [r] と交替することがある。これは「語中の d は、j や r や時には l にとってかわりやすい。例えば、meidan の代わりに、meijan, meiran, meian, meilan、或いは、meidan と発音される」という Lieko (1992) の指摘を裏付けるものであろう。

④ ナ行

ナ	ニ▽	ヌ▽	ネ	ノ
日 [n a	n i	n u	n e	n o]
フ [n a	n i	n u	n e	n o]
ニャ▼	ニユ▼	ニョ▼		
日 [ɲ a	ɲ u	ɲ o]		
フ [—	—	—]		

歯茎鼻音 [n] はフィンランド語にも存在するが、拗音ニャ、ニユ、ニョに相当する音節を探すことは難しい。

⑤ ハ行 バ行 パ行

ハ	ヒ▽	フ▽	ヘ	ホ
日 [h a	ç i	Φ w	h e	h o]
フ [h a	h i	h u	h e	h o]
ヒャ▽	ヒュ▽	ヒョ▽		
日 [ç a	ç w	ç o]		
フ [h j a	h y	h j o]		
バ▽	ビ▽	ブ▽	ベ▽	ボ▽
日 [b a	b i	b w	b e	b o]
フ [v a	v i	v u	v e	v o]
ビャ▼	ビュ▼	ビョ▽		
日 [b j a	b j w	b j o]		
フ [――	――]	「v y ö」		
パ	ピ▽	プ▽	ペ	ポ
日 [p a	p i	p w	p e	p o]
フ [p a	p i	p u	p e	p o]
ピャ▼	ピュ▼	ピョ▽		
日 [p j a	p j u	p j o]		
フ [――	――]	「p y ö」		

声門摩擦音 [h] はフィンランド語に存在するが、硬口蓋摩擦音 [ç] は存在しない。しかし、拗音ヒャ、ヒュ、ヒョに近い音節は以下の単語の下線部に見ることができる。

l a h j a (おみやげ) H y t t i n e n (人名) s o h j o (氷のある状態)

厳密には、フィンランド語の h j a や h j o における h は前の母音を長音化し j a や j o とは別の音節をなすようにきこえる。この点で日本語のヒャやヒョとは異なる。

有声の両唇破裂音 [b] はフィンランド語に存在しない。これにもっとも近い音は日本語で音韻的対立をなさない両唇摩擦音 [v] である。拗音ビョは

「v y ö (ベルト)」の下線部に近い。

無声の両唇破裂音 [p] はフィンランド語では日本語より明瞭に発音される。拗音ピョに近い音節は「p y ö k k i (ぶなの木)」の下線部に見ることができる。

⑥ マ行

マ	ミ▽	ム▽	メ	モ
日 [ma	mi	mu	me	mo]
フ [ma	mi	mu	me	mo]
ミャ▼	ミュ▽	ミョ▽		
日 [mj a	mj u	mj o]		
フ [ー	my]	「m ö」		

両唇鼻音 [m] はフィンランド語にも存在する。拗音ミュは「my r s k y」(嵐) に、ミョは「m ö k k i」(森小屋) の下線部に近いと見ることができる。

⑦ ラ行

ラ▽	リ▽	ル▽	レ▽	ロ▽
日 [ʃ a	ʃ i	ʃ u	ʃ e	ʃ o]
フ [l a	l i	l u	l e	l o]
リャ ▼	リュ▽	リョ▽		
日 [ʃ j a	ʃ j u	ʃ j o]		
フ [r j a	r j u	r j o]		

フィンランド語の /r/ は巻き舌が強いため、日本語の /r/ はフィンランド語の /l/ で発音されるほうが日本語の響きに近く聞こえる。リャ、リュ、リョに近い音節は、次の下線部に見ることができる。

Mar j a (人名) kar j u a (どなる) tar j o t i n (お盆)

⑧ 半母音

ヤ	ユ	ヨ
日 [j a	j u	j o]
フ [j a	j u	j o]

フィンランド語の硬口蓋半母音 j [j] は、摩擦の強いドイツ語の /j/ とは異なり、日本語の半母音 y [j] にほぼ等しい。

ワ▽
日 [w a]
フ [v a]

日本語の両唇軟口蓋音 [w] はフィンランド語には存在しない。かつて綴り字としての「w」はあったが、唇歯摩擦音 [v] を代表していた。

Wiipuri [viipuri] 地名

現代フィンランド語では「Viipuri」と「v」で表記され、文字としての「w」は存在しない。

⑨ 特殊音素

フィンランド語に日本語の長音と促音に相当する音節があるから、この音節の発音や聞き取りにおいて問題がないと言われているが、果たしてどうであろうか。長音と促音の音節について観察する。

a. 長母音

I. 1. ②でみたようなフィンランド語は母音の長短が対立し、意味において弁別的である。この点で長母音は日本語の長音と同じ機能を持つ。しかし、アクセントの有無や語中における位置によって、フィンランド語の長母音のほう実際に長く発音されることが多い。特に次の二つの場合において、日本語の長母音と単母音の区別はフィンランド語話者にとって難しいと思われる。

a-1 高低アクセントが落ちる前の長母音

フィンランド語には奇数音節強勢を特徴とするアクセントがあり、特に第一音節の強勢アクセントは最も強いので、ここに長母音がきた場合長さも強調さ

れる。日本語の単語で第一音節に長音がきて、次の音節でピッチアクセントが落ちる場合、フィンランド人にとってこの長母音と単母音の区別は難しい。

「とうかいどう（東海道）」と「とかいどう」

「そうせんきょ（総選挙）」と「そせんきょ」

しかし、第一音節にピッチアクセントが落ちる場合は、単母音と混同されることは少ないようである。

「こうざん（鉱山）」「こうぎ（抗議）」など。

a-2 語尾の長母音

特に長音の前の音節でピッチアクセントがおちる場合、長音としての聞こえが弱くなって単母音との区別が難しくなるようである。

「とりょう（塗料）」と「とりょ」

「こせい（個性）」と「こせ」

b. 促音

フィンランド語の長子音は日本語の促音に相当し、同じ機能を持つ。日本語の促音との違いは、日本語では促音は無声子音にしかおこらないが、フィンランド語では有声子音にもおこることである。これは逆に、フィンランド語の有声長子音の発音は日本語話者にとって困難である。

Kekkonen（人名） Jussi（人名） Karri（人名）

Ulla（人名）

Ⅲ まとめ

日本語とフィンランド語の音韻体系は異なる。しかし、母音ウとuの場合のように音声的には異なっているが、非音素的な違いであることもある。二つの言語の音韻的な違いで最も困難なものは、フィンランド語に有声の破裂音や摩擦音が限られていることである。また日本語の音節のいくつかに関しては、フィンランド語の他の異なる音素から日本語の中で音韻的対立をなさないものを探せることが分かった。フィンランド語の発音との対応という観点から、日本語

の音節を次のように分類することができる。

*フィンランド語に相当する音節があるもの

ア イ エ オ カ ク ケ コ タ テ ト ダ デ ド ナ ネ ノ
ハ ヘ ホ パ ペ ポ マ メ モ ヤ ユ ヨ

*フィンランド語に代用できる音節があるもの

ウ キ ク キュ ガ ギ ゲ ゴ サ シ ス セ ソ シャ シュ ショ
ツ ニ ヌ ヒ フ ヒャ ヒュ ヒョ バ ビ ブ ベ ボ ビョ ピ
プ ピョ ミ ム ミュ ミョ ラ リ ル レ ロ リャ リュ リョ
ワ

*フィンランド語になく代用もできない音節

キャ キョ グ ギャ ギュ ギョ ザ ジ ズ ゼ ゾ ジャ ジュ ジョ
チ チャ チュ チョ ニャ ニュ ニョ ビャ ビュ ピャ ピュ ミャ

本稿では以下のことが明らかになった。

1. フィンランド語に相当する音節があるものは、主にイ段とウ段以外の無声音の直音、鼻音、ヤ行音、4つの母音、有声音ではダ行音などである。
2. フィンランド語に代用できる音節があるものは、直音ではイ段とウ段のもの、日本語では音韻的対立はないが、音声的に異なるサ行音とラ行音、有声音ではガ行音とバ行音である。
3. フィンランド語に代用できる音節がないものは、ザ行音とその拗音、グとガ行の拗音、バ行の拗音の一部など、有声音と拗音に集中する。
4. 長母音に関しては、長母音のある音節でピッチアクセントが落ちる場合には認識されやすいが、その前後の音節でピッチアクセントが落ちる場合は認識されないことがある。
5. 拗音に関しては、フィンランド語のöやyによって一部の音節が代用できる。

しかし、5に関して、どの子音の場合に可能なのかということについては、詳しくは立ち入らなかった。

本稿をまとめるにあたって、Dr. Juha Janhunen（ヘルシンキ大学 北アジア学・ウラル語学）に貴重な助言をいただいた。謝意を示したい。

（注1）フィンランド語に「kotimainenkiele」ということばがある。これは「内国語」と訳され、「フィンランド国内で話されている言語」を意味し、具体的にはフィンランド語やスウェーデン語などをさす。この概念を使うと日本における内国語は日本語や朝鮮語などをさすことになる。内国語や母国語という言葉は二つの言語で喚起される意味が異なる。本稿では、フィンランド語を母語あるいは第一言語とする者をフィンランド語話者とよぶことにする。

（注2）日本語話者に音声的にどのように受け止められているか随筆から拾う。

「母音が多いせいで、時々でたらめな日本語に聞こえることもある。（中略）デタラメどころか、ほとんど日本語と同じ発音の言葉も少なくない。例えば、目—me（私たち）、手—te（あなたがた）、さ来年—salainen（秘密の）、禁句—kinkku（ハム）、鳥—tori（市場）、（中略）老婆—rouva（既婚女性の敬称）と書いたらきりがない。それから、フィンランド人の偉い人に対して決して『閣下』と言ってはいけない。なぜならフィンランド語でkakkaは排泄物のことだから。」（稲垣美晴「フィンランド語は猫のことば」文化出版局刊 1981年45・46頁より）

（注3）第一章の記述においてはBranch (1990), Collinder (1965), Hajdu (1975), Karlsson (1983, 1991), Lieko (1992), Minn (1977), 尾崎 (1982), 小泉 (1983・1991), 松村 (1981・1992) を参考にした。

（注4）フィンランド語には、母音で終わるある語形の直後において、後続の語の語頭の子音が長子音として発音される現象がある。後続の語の語頭が母音の場合は、母音間に喉頭閉鎖音が聞かれることがある。

Muuta pois [muutappois] (出て)

Tule tanne takaisin [tulettannettakaisin] (戻ってきて)

これにはBranch (1990) のように「muuta」や「tule」のあとに形態音素[?]をたて子音音素に含める考え方もある。

これ以外にも、語中において子音が長子音として発音される場合がある。

sydämellinen [sydammellinen] (心から)

Tulepa tanne [tuleppa tanne] (ここに来て)

参考文献

- BRANCH, M. 1990 "Finnish" in COMRIE B. (ed.) *Major Languages of Eastern Europe*. Routledge
- COLLINDER, B. 1965 *An Introduction to the Uralic Language*. Univ. of California Press
- HAJDU, P. 1975 *Finno-Ugrian Languages and Peoples*. Andre Deutsch
- 服部四郎 1990 『新版音韻論と正書法』大修館書店
- 堀誉子美 1993 「フィンランド語の音節と日本語の音節」第六回日本語教育連絡会議報告書
- 今田滋子 1989 『教師用日本語教育ハンドブック 6 発音』凡人社
- 稲垣美晴 1981 『フィンランド語は猫の言葉』文化出版局
- 城生佰太郎 1988 「音声記号」『講座日本語と日本語教育第2巻 日本語の音声と音韻(上)』明治書院
- KARLSSON, F. 1983 *Finnish Grammar*. Werner Söderström Osakeyhtiö
- 1991 "Finnish" *International Encyclopedia of Linguistics* vol.2. Oxford Univ. Press
- カッケンブッシュ他 1991 「外来語にみられる日本語化規則の習得—英語話者の調査に基づいて—」『日本語教育』74号
日本語教育学会
- 小泉保 1983 『フィンランド語文法読本』大学書林
- 1991 『ウラル語のはなし』大学書林
- 国立国語研究所 1990 『外来語の形成とその教育』大蔵省印刷局
- 小松英雄 1981 『日本語の世界7. 日本語の音韻』中央公論社

- LIEKO, A. 1992 *Suomen Kielen Fonetikkaa ja Fonologiaa Ulkomaalaisille*. Loimaan Kirjapaino Oy.
- 松村一登 1981 『エクスプレスフィンランド語』白水社
- 1992 「フィンランド語」『言語学大辞典』下一巻 三省堂
- MINN, E.K. 1977 "On The Principles of Finno-Ugric Derivation" in SINOR D.(ed.) *Studies in Finno-Ugric Linguistics*. Bloomington
- ミラー, R. A. 西田龍雄訳 1981 『日本語とアルタイ諸語』大修館書店
- 大曾美恵子 1991 「英単語の音形の日本語化」『日本語教育』74号 日本語教育学会
- 尾崎義 1952 『フィンランド語四週間』大学書林
- シュービゲル, M. 小泉保訳 1973 『新版音声学入門』大修館書店
- 杉藤美代子 1988 「音節か拍か」『講座日本語と日本語教育第2巻日本語の音声と音韻(上)』明治書院
- 田守育啓 1993 「日本語オノマトペの音韻・形態的特徴」『言語』22巻6月号
- 上村幸雄 1988 「五十音図の音声学」『講座日本語と日本語教育 第2巻日本語の音声と音韻(上)』明治書院